日本語増補版への序

1997年10月に拙著『台湾歴史図説』が出版されると、幸い数ヶ月で売り切れ、翌年９月に改めて出版された聯経出版社版は、それ以来、読者のご高配に与りながら今日まで版を重ねつづけることができた。

ふり返ると、本書は1994年末にその起源を持っている。当時「台湾史」は、ようやくアカデミズム史学の「領域」の一つとして認められ始めたばかりで、研究には隆盛の勢いがあった。そうしたなか、財団法人霖英文化教育基金会が私の所属する機関に、「あらゆる年代の読者に読まれる」、「多くの図版や写真を使った」台湾史の本の出版を要請された。この仕事の依頼を受けた時、参考とすべき模範的著作は皆無に等しく、しばし茫然と周囲を見回すありさまだった。本書執筆のための研究に着手する一方、大量の図版・写真と文献資料を収集し、膨大な資料に向き合いながら、私は深く思いを巡らせることになった。当時の思索の多くの結果が本書に反映されている。

本書にいくらかでも特色があるとすれば、おそらく次の３点を挙げることができるかもしれない。まず、本書は先史時代から1990年代までを、いくつかの主題を選びながらも一貫性を失わないよう記述した。第二に、台湾島を歴史の単位とし、先住民を記述の起点とし後の章にもそれを生かし、「漢人開発史観」を離れ、台湾史の叙述に新たな局面を開いた。第三に、本書は多くの図版・写真をとり入れ、文字と図版によって互いを補い相互参照させ、読者が歴史について熟考し味わうことができる場を提供した。もちろん、読者にご愛顧いただいているのがこうした特色によるものかどうかは、私の想像の範囲を超えている。

この度の増補版では、すでに日本語版のために加筆されていた「戦後篇」に加え、元の章立てに新しく２章を追加した。正確に言えばそれは追加ではなく、1997年に本書を出版する当時、構想は練りながらも時間が足りず書くことができなかったものである。その２章とは「第10章 知識人の反植民地運動」と「第11章 台湾人の芸術世界」である。歳月を隔て、当時書かれていたはずのものと現在書くものとは当然異なっているだろうが、ともかくも私の小さな願いはかなうこととなった。

台湾史の研究は、拙著初版が刊行されて以来、目覚ましい進歩を遂げ、史料は不断に発見され、論著は古きを退け新しきが絶えなく生まれ、海洋史の観点が加えられるなど、視野の上でも大きな展開をもたらしている。私たちは今、台湾史研究を深め高められるかどうかの正念場に立っているのだと言っても過言ではないだろう。この拙著が、台湾で多くの読者を得て、また台湾の外にまで読者を広げる機会を得て、私たちの歴史を世界に紹介することができたことは、私個人にとって非常な栄誉と幸福である。2009年の秋、「東アジア出版人会議」が選んだ「東アジア人文書の100冊」に、台湾からも15冊が選ばれたが、そこに本書の名前もあった。その光栄は私個人のものではなく、私たち社会のひとりひとりの自由と民主化への努力に帰されるものである。地域に根ざした自由社会の多様性は、世界の至宝である。私たちはようやく自由という門の前に辿り着いたのであり、後戻りはできない。また、未だその門をくぐり抜けることのできない人々に対して、私たち自身の経験をもって彼らに思いを寄せることも忘れてはならない。

以前、先住民の方が本書を読んで、私を「先住民の友」と呼んでくれたことがあった。私にとって、それはどんな肩書きよりも栄誉に満ちたものである。しかし、この「先住民の友」は、先住民族についての理解になんと欠けていることだろうか。1930年10月27日に勃発した霧社事件から、すでに80年以上の歳月がたっている。私は想像する。清く冷とした高山と深い谷から聞こえてくる38式歩兵銃の音――モーナ・ルダオが自ら生命を絶った銃声を。遥かに遠く、あいまいなその響きを。しかし、先住民研究の進展に伴って、私たちはもう少し多くのことを感じることができるようになるかもしれない。歴史とは、不断に過去に相対して行われる観照と省察なのであり、それは私たちという現在の「存在」に時間の深度を持たせるものであり、私たちが清明な気持ちで未来の道を思考することを助けるものである。

周婉窈（しゅう・えんよう／Chou Wan-yao）

2012年七夕　龍坡里芬陀利室にて